鈴鹿市埋蔵文化財調査報告 X

三　重　県　鈴　鹿　市

蛸　田　古　墳

1 9 9 1

鈴鹿市教育委員会

鈴鹿市遺跡調査会

例　　言

1．本書は河曲西部土地改良総合整備事業に伴い発掘調査を実施した三重県鈴鹿市木田町字南蛸田所在の蛸田古墳の報告書である。

2．発掘調査は昭和63年10月12日から12月４日まで実施した。

3．調査は鈴鹿市遺跡調査会（代表　鈴鹿市教育委員会教育長　市川年夫）が主体となり、社会教育課（当時）中森成行・新田剛が担当した。

4．調査補助員及び作業員は下記のとおりである。

補助員：井口治（神戸高等学校生徒）・田中智子（臨時職員）・辻公則（石薬師高等学校生徒）　※所属はいずれも調査当時

作業員：宇佐美藤子・久住よし子・坂上ふさ子・椎名博・杉野あさゑ・田中斂・田中つるお・平岡善治・山中綾子・山中茂子

5．本書の編集執筆は新田剛が担当した。

6．出土遺物の実測及びトレースは新田剛・田中智子が、写真撮影は新田剛が行った。

遺物整理は浅野和歌子・石谷佳誉子・加城陽子・杉本恭子が行った。

7．土器実測図中の矢印は工具の方向を表す。

8．挿図中に使用した方位は磁北を示す。

9．調査並びに報告書作成に際し下記の皆様並びに関係機関から御指導・御助言を賜りました。記して感謝申し上げます。（敬称略）

伊藤洋・大場範久・岡田登・小玉道明・仲見秀雄・八賀晋・村山邦彦・吉田義隆

鈴鹿市文化財調査会・三重県教育委員会文化振興課・三重県埋蔵文化財センター

10．出土遺物は鈴鹿市教育委員会にて保管している。

目　　次

Ⅰ．前言 …… 1
Ⅱ．位置と歴史的環境 …… 2
Ⅲ．遺構と遺物 …… 6
1．調査前の墳丘 …… 6
2．周　溝 …… 6
3．埋葬主体部と付属施設 …… 6
4．盛　土 …… 10
5．出土遺物 …… 13
(1)　埋葬主体部出土の遺物 …… 13
(2)　墓道出土の遺物 …… 14
(3)　その他の遺物 …… 14
Ⅳ．まとめ …… 17

挿　図　目　次

第1図　周辺の遺跡（1／5万） …… 1
第2図　位置図（1/5,000） …… 3
第3図　位置図（1/1,000） …… 7
第4図　調査前測量図（1/200） …… 8
第5図　周溝実測図（1/200） …… 9
第6図　上：墳丘及び周溝断面図（1/100）下：主体部実測図（1/40） …… 11・12
第7図　出土遺物（1／3） …… 15

表　目　次

表1　出土遺物一覧 …… 16

写　真　図　版

写真図版1　調査前全景／作業風景／主体部と墓道
写真図版2　石材抜取痕／主体部／調査後全景
写真図版3　出土遺物

Ⅰ．前　　言

昭和63年９月、河曲西部土地改良総合整備事業の進展に伴い、事業地内に存在する蛸田古墳の保存について河曲西部土地改良区、鈴鹿市経済部ほ場整備課、鈴鹿市教育委員会事務局社会教育課の３者で協議を行った。しかし、工事設計上古墳の削平は免れないとの結論に達し、文化財保護法の主旨に則って記録保存を図ることとなった。発掘調査にあたり鈴鹿市教育委員会事務局内に設けた鈴鹿市遺跡調査会代表市川年夫と鈴鹿市長衣斐賢譲との間で委託契約を締結し、昭和63年10月12日から12月４日まで実施した。

第１図　周辺の遺跡　　縮尺５万分の１

１．北野古墳　２．白鳥塚古墳群　３．椎山中世墓　４．川原井瓦窯跡　５．津賀平遺跡　６．加佐登古墳群　７．加佐登遺跡　８．岡田遺跡　９．岡田古墳群　10．陶古山遺跡・南町古墳群　11．北町古墳　12．乗鞍山古墳　13．石薬師東遺跡・同古墳群・丸山古墳群　14．貝戸部遺跡・若宮古墳　15．一反通遺跡　16．舟塚古墳　17．南山遺跡・南山古墳群　18．口山遺跡・同古墳群　19．添遺跡・中山古墳群　20．内谷遺跡・山辺横穴墓　21．山辺遺跡・同古墳群　22．南山遺跡・大谷古墳　23．蛸田遺跡・蛸田古墳　24．伊勢国分寺跡　25．尼寺跡推定地　26．大鹿山古墳群　27．磐城山遺跡・同古墳群・木田城跡　28．沖ノ坂遺跡・同古墳群　29．中尾山遺跡・同古墳群　30．富士山遺跡・同古墳群　31．寺山遺跡・寺田山古墳群　32．扇広遺跡・同古墳群　33．青谷遺跡　34．茶山遺跡・高岡山古墳群・高岡城跡　35．狐塚遺跡・同古墳群

Ⅱ．位置と歴史的環境

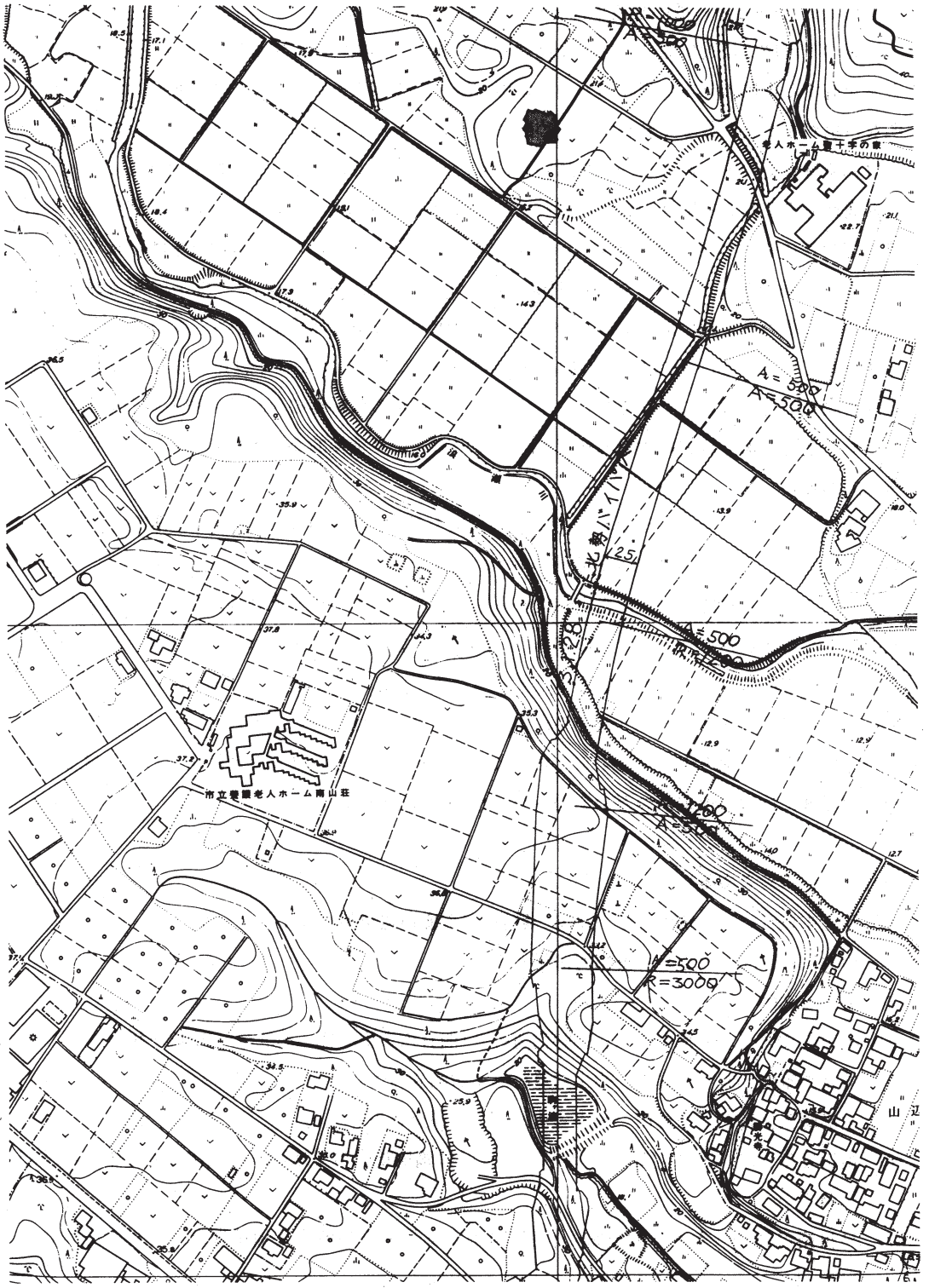
蛸田古墳は鈴鹿川の支流浪瀬川の左岸の標高約22ｍの低中位段丘上に位置する。段丘と浪瀬川の流れる谷底との比高は約７ｍである。所在地の字は木田町字南蛸田である。そのほか、地元の人の話によれば「フルヤシキ」とも呼ばれ、浅い谷を挟んで古墳の西には「トノマイ」という地名も残る。付近の古墳としては鉄刀等の出土が伝えられる狐塚１～４号墳(35)(1)や墳丘及び石室石材を神社に転用した大谷古墳(22)(2)があり、浪瀬川を挟んで対岸の段丘上には全長44ｍの前方後円墳である乗鞍山古墳(12)(3)が残る。

鈴鹿地方には蛸田古墳の位置する鈴鹿川左岸を中心として各時代にわたり数多くの遺跡が残されている。先土器・縄紋時代の遺跡は発掘調査例が乏しいため詳細は不明であるが、遺物散布地は数多く知られており、とくに先土器時代遺跡の分布は詳細に把握されている(4)。

弥生時代になると遺跡数は爆発的に増加する。前期の遺跡は上箕田遺跡(5)、天ノ宮遺跡(6)、大木ノ輪遺跡(7)、など旧河川の自然堤防上で調査され知られているが、一反通遺跡(15)(8)、のように鈴鹿川に面した段丘上に分布するものもある。中期以降では上箕田、一反通など前期以来継続するものの他に東庄内Ｂ遺跡(9)、中尾山遺跡(29)(10)、沖ノ坂遺跡(28)(11)、扇広遺跡(32)(12)、起Ａ遺跡(13)など遺跡数は飛躍的に増加し、かつ立地も多様になる。後期では上箕田、一反通の他、南山遺跡(17)(14)、扇広遺跡、青谷遺跡(33)(15)があり、最近稲生地区の南谷遺跡では後期の遺構・遺物が検出されいる(16)。このように、平野に面した台地上には大抵弥生時代の遺跡が残さていると言ってよい。

弥生遺跡の豊富さは古墳時代にもそのまま引き継がれ、鈴鹿地方は県下でも屈指の古墳密集地域となっている(17)。初元的な古墳としては、鈴鹿川中流域に能褒野王塚古墳(18)、愛宕山１号墳(19)、上椎ノ木１号墳(20)が、下流域に寺田山１号墳(31)が存在する。中流域においては後続する古墳として西ノ野５号墳、城山古墳、西ノ野王塚古墳、白鳥塚１号墳などが知られ、６世紀以降も井田川茶臼山古墳(21)、井尻古墳などの首長墓級の古墳が築かれている。金製耳飾や五鈴鏡を出土した保子里１号墳(22)もこの頃のものであろう。一方、下流域においては調査例が乏しく詳細は不明であるが、前方後円墳としては富士山１号墳(30)、乗鞍山古墳(12)、高岡山９号墳(34)がある。

さて、鈴鹿地方における後期古墳の分布については横穴式石室をもつ例の希薄さが従来から指摘されてきた(23)。井田川茶臼山古墳は同地方において最も早く横穴式石室が導入された古墳で、金銅製品の豊富さから特に際立った存在である。横穴式石室は茶臼山以降、中小の古墳に引き継がれ鈴鹿地方における例数は中流域を中心として着実に増えつつある。亀山市域では太岡寺６号墳、同４号墳(24)正知浦２号墳(25)、太岡寺３号墳、正知浦１号墳、鈴鹿市内では大谷古墳、南山６号墳(17)(26)、保子里18号墳(27)、北野古墳(1)(28)があり、時期は不明であるが御幣川沿いの双児塚１・３号墳(29)も横穴式石室をもつ古墳として知られている。その他、深溝狐塚古墳(30)と宮



第２図　位置図（１/5,000）

上道古墳(31)があるが古墳の築造年代を示す遺物は未見である。

鈴鹿川下流域では近年開発に伴う発掘調査が進展し、古墳の調査例も増えつつあるが、横穴式石室を有する古墳の分布は現在のところ蛸田古墳をその東限としている。下流域に内部主体が不明な古墳がまだまだ数多く分布するため断言はできないが、鈴鹿川流域における横穴式石室の分布は中流域にその中心があり、下流にいくにしたがって希薄になることが観取できる。

鈴鹿地方の豊富な古墳群の分布に表わされる古墳時代地方権力の発展は、やがて伊勢国府の設置、国分寺の造営に継承されていく。伊勢国分寺僧寺跡(24)については1988年度以来3次にわたって発掘調査が実施され、築地に囲繞された寺域の規模が明らかになった(32)。尼寺跡(25)は1990年度にその推定地付近にトレンチを設定したが明確な遺構は検出されず、いまだその所在は確認されていない(33)。長者屋敷遺跡は1957年藤岡謙二郎氏らによって調査されて以来(34)一切組織的な調査が行われることなく今日に至っている。近年では耕地の天地替えや工場の進出が著しいため、遺跡の保存状態は危機的状況に陥っている。より積極的な保護体制への転換が望まれる所以である。

中世以降では古瀬戸や常滑焼の蔵骨器が多数出土した椎山中世墓(3)(35)や、木田城(27)、高岡城(34)など(36)、遺構の保存の良好な中世城館が点在する。

以上のように、鈴鹿川流域は先史時代から古代・中世に至るまでその地理的条件を背景として絶え間なく遺跡が残されてきた地域であり、鈴鹿市の歴史を語る上では極めて重要な地域である。しかし、地理的には旧扇状地の扇端に位置するため土壌の流出が著しく、通常の耕作等によっても容易に遺構面に達するという遺跡の保存にとっては不利な条件に置かれていることも十分認識する必要がある。地方史を構築するための大切な資料である埋蔵文化財を活用する大前提として、遺跡の保護には常に慎重かつ万全を期さなければならない。

〔註及び引用参考文献〕

(1) 鈴鹿市教育委員会1987「Ⅴ．遺跡一覧表」『鈴鹿市遺跡地図』Ⅴ－3、Ⅴ－23

(2) 鈴木敏雄1936『三重県河藝郡河曲村考古誌考』

(3) 前掲1文献　Ⅴ－3

(4) 岡田登1990「北勢地方の旧石器時代遺跡」『四日市市史研究』第3号　PP43～46

(5) 仲見秀雄他1961『上箕田－弥生式遺跡第1次調査報告』
大場範久他1970『上箕田－弥生式遺跡第2次調査報告』

(6) 増田安生1981「天ノ宮遺跡」『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財調査報告』PP25～34

(7) 早川裕己1980「大木ノ輪遺跡」『昭和54年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財調査報告』PP7～14

(8) 岡田登1980「三重県鈴鹿市北部丘陵採集の玉造り遺物」『古代文化』第32巻第7号　pp56～

65　鈴鹿市教育委員会1989年調査未報告
(9)　小玉道明他1970「東庄内Ｂ遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』　PP45～80
(10)　鈴鹿市教育委員会1990年調査未報告
(11)　鈴鹿市教育委員会1991年調査未報告
(12)　鈴鹿市教育委員会1990年調査未報告
(13)　山下雅春1983「起Ａ遺跡」『昭和57年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財調査報告』PP９～18
(14)　新田剛1991『南山遺跡・南山６号墳』　PP15～23、34～35
(15)　大場範久・仲見秀雄1972「鈴鹿市高岡青谷遺跡調査報告」『神戸史談』第８号　PP１～６
(16)　鈴鹿市教育委員会1991年調査未報告
(17)　和田年弥1974「古墳文化の地域的構造とその特質－伊勢国鈴鹿地方の場合」『古代学研究』第72号　PP１～13
(18)　三重県教育委員会・亀山市教育委員会『亀山の古墳－埋もれた古代権力－』PP２
(19)　井口敬一他1975「鈴鹿・亀山地域調査報告」『ふびと』32　PP３～22
(20)　三重県埋蔵文化財センター「上椎ノ木古墳・上椎ノ木館跡」『一般国道国道１号線バイパス埋蔵文化財発掘調査概要』Ⅵ　PP３～10
(21)　三重県教育委員会1988『井田川茶臼山古墳』
(22)　大場範久1980「第二章　古墳時代－大和朝の支配－」『鈴鹿市史』第１巻　PP154～158
(23)　三重県教育委員会1989『鈴鹿地方の考古資料』PP９
(24)　三重県教育委員会1964「太岡寺古墳群」『名阪国道敷地内埋蔵文化財発掘調査報告』
(25)　三重県教育委員会1988『一般国道１号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概要　正知浦・堀越遺跡第１次調査』Ⅳ
(26)　前掲14文献　PP24～33、35
(27)　真田幸成・仲見秀雄1964「保子里18号墳発掘調査報告」『神戸史談』第４号　PP９～19
(28)　大場範久1978「北野古墳」『三重用水加佐登調整池関係遺跡発掘調査報告』PP６～11
(29)　前掲22文献　PP189～190
(30)　大場範久・仲見秀雄1972「鈴鹿市深溝狐塚古墳調査報告」『神戸史談』第８号　PP７～11
(31)　鈴鹿市教育委員会「Ⅸ．鈴鹿市内出土須恵器集成」『鈴鹿市遺跡地図』
(32)　鈴鹿市教育委員会1990『伊勢国分寺－第二次発掘調査概要』
(33)　浅尾悟1991『伊勢国分寺－第三次発掘調査概要報告』
(34)　藤岡謙二郎・西村睦男1957「歴史地理的にみた鈴鹿市広瀬台地の初期歴史時代遺跡」『史迹と美術』２７９
(35)　伊藤久嗣1978「椎山中世墓」『三重用水加佐登調整池関係遺跡発掘調査報告』PP14～58
(36)　三重県教育委員会『三重の中世城館』PP55～63

Ⅲ. 遺 構 と 遺 物

1．調査前の墳丘（第４図）

調査前、蛸田古墳一帯は孟宗竹の生い茂る林となっていた。地元地権者の談話によれば、元々は墳丘の保護のために竹を移植し、周囲は耕地として利用されていたという。よって、墳丘をめぐる溝様のおちこみは耕地との境界に掘削されたものと理解される。調査当初は墳丘の現況から一辺約11ｍ前後の方墳であると想定して調査を開始した。墳丘の現存高は約1．３ｍで、南半は明らかに土取り等による削平を受けていることが観察できた（第４図）。

2．周溝（第５図）

現存墳丘軸に合わせて調査区を設定し表土掘削を試みたが竹株の抜根は難行を極めた。そこで、墳丘以外の部分については重機を導入して表土を除去し遺構検出を行うこととした。

遺構検出面は表土及び竹根による撹乱層を約0．６ｍ除去した黄褐色土層上面である。その結果、周溝と、周溝と直角に交差する溝が検出された（第５図）。後者の溝は主体部方面から延びており、いわゆる墓道と呼ばれているものである。周溝の規模は検出面にて幅2．５～4．３ｍ、深さ0．２ｍを測る。周溝の形態より、周溝を含めて東西21.7ｍ、南北22.1ｍ、墳丘部分で東西14.3ｍ、南北15.5ｍの方墳であることが判った。ただし、墳丘軸は当初の予想に反して約90度振れており、南北方位にほぼ平行して造られていることが明らかとなった。周溝からは石室の石材と考えられる花崗岩の円礫が４点散乱するように出土している他（第５図）、土師器甕（第７図13）、山茶碗（第７図15）が出土している。

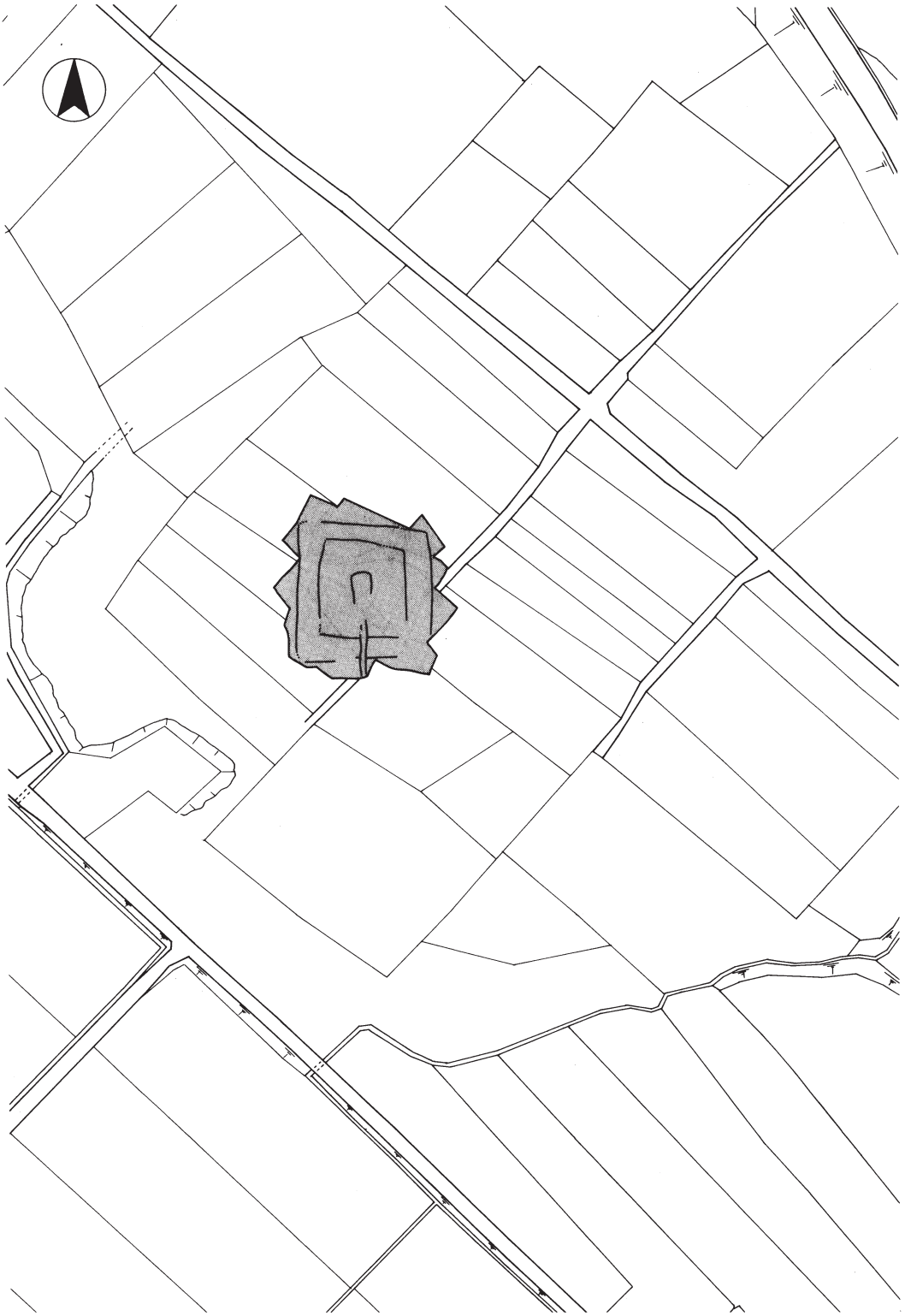
3．埋葬主体部と付属施設（第６図）

周溝より石室石材が出土したことから横穴式石室の存在を想定し主体部の検出を行った。その結果、南に開口する横穴式石室であることが判った。主体部軸はＳ６°Ｅである。

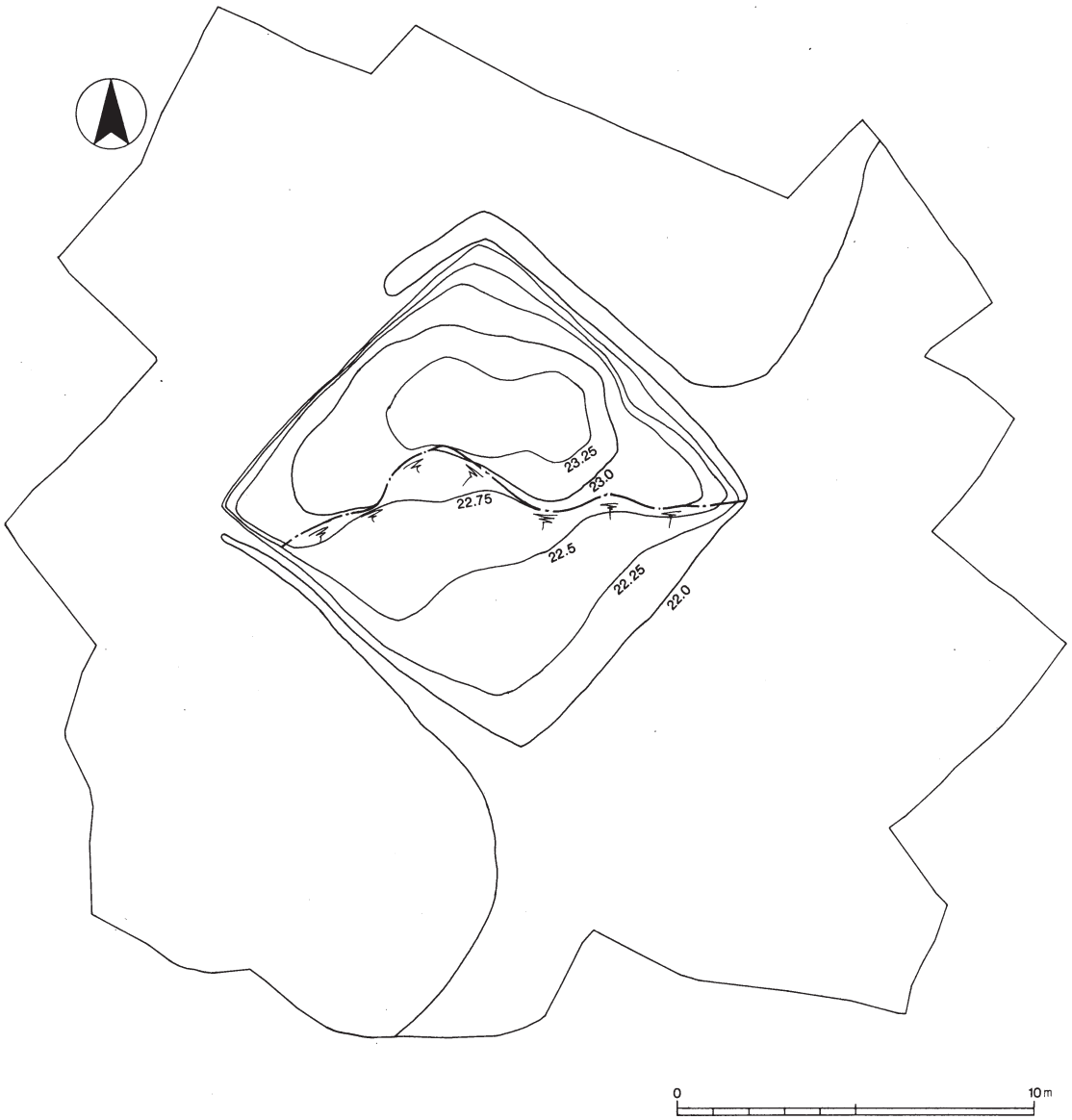
主体部は２度にわたって再掘ないし盗掘を受けており、本来の主体部及びほりかたの埋土はごく一部分のみ残存する。第６図土層断面図ＡＢでは６・７と８が再掘壙埋土、９・10が築造当初のほりかた埋土にあたる。石材は底面側壁基底石を２個原位置で残す他は、ことごとく抜き取られており、玄門及び羨道付近は最近の土取りにより全く本来の形態を留めていない。残存する石材抜き取り痕から幅約1．３ｍの長方形の平面形態をもつ玄室が想定できる。主体部ほりかた幅は底面で約2．５ｍで、旧表土以下を0．４～0．６ｍ掘り抜いている。

主体部の遺物には須恵器坏蓋、坏身、高坏、平瓶（第７図１～９）があるが、再掘壙埋土（第６図土層断面図ＡＢの６・７）から出土したものばかりで、原位置を保つものは皆無である。

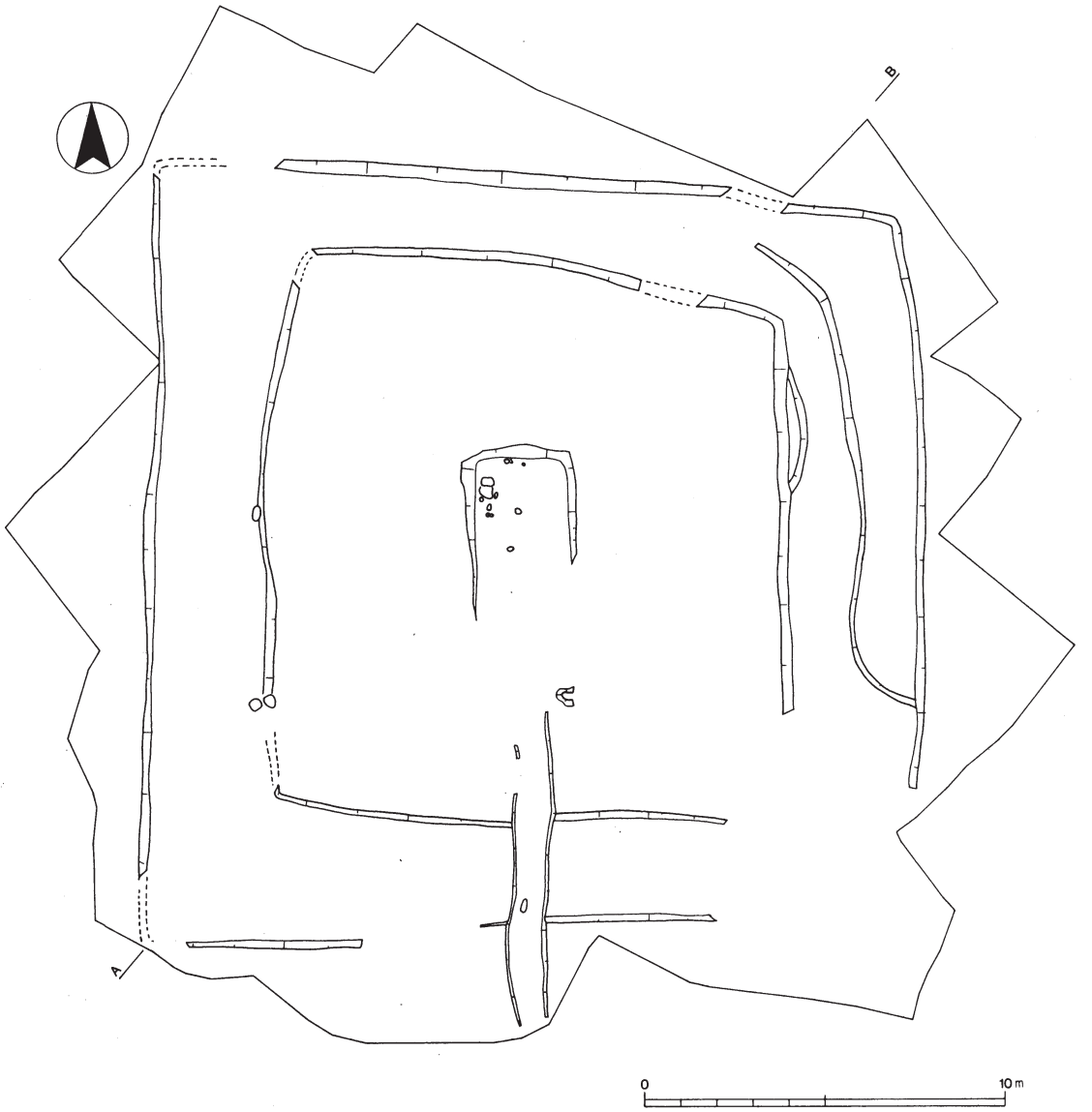
主体部南方からは周溝と直交して墓道が長さ8．８ｍにわたって残存している。墓道の規模は



第３図　位置図（１/1,000）



第４図　調査前測量図（１/200）



第５図　周溝実測図（１/200）

検出面にて幅1.2ｍ、深さ0.3ｍを測り、周溝底面より0.2ｍ深く掘られている。墓道末端の底面は検出面と同一面となって自然にとぎれるが本来はさらに長く延びていた可能性もある。埋土からは須恵器坏蓋（第７図10）が出土している。墓道土層断面ＥＦ（第６図）の観察結果は以下のとおりである。

(1) 褐色土（10YR4/6）
(2) 褐色土（10YR4/4）
(3) 暗褐色土（10YR3/4）
} 径１～５㎝の礫を含む

(4) 黒褐色土（10YR2/3）。褐色土(7.5YR4/6)をブロック状に含む
(5) 暗褐色土（10YR3/4）。褐色土(7.5YR4/6)を斑点状に含む
(6) 褐色土（10YR2/3）
(7) 暗褐色土（7.5YR3/4）。しまりがある。黒色土（10YR1.7/1）を含む

４．盛土

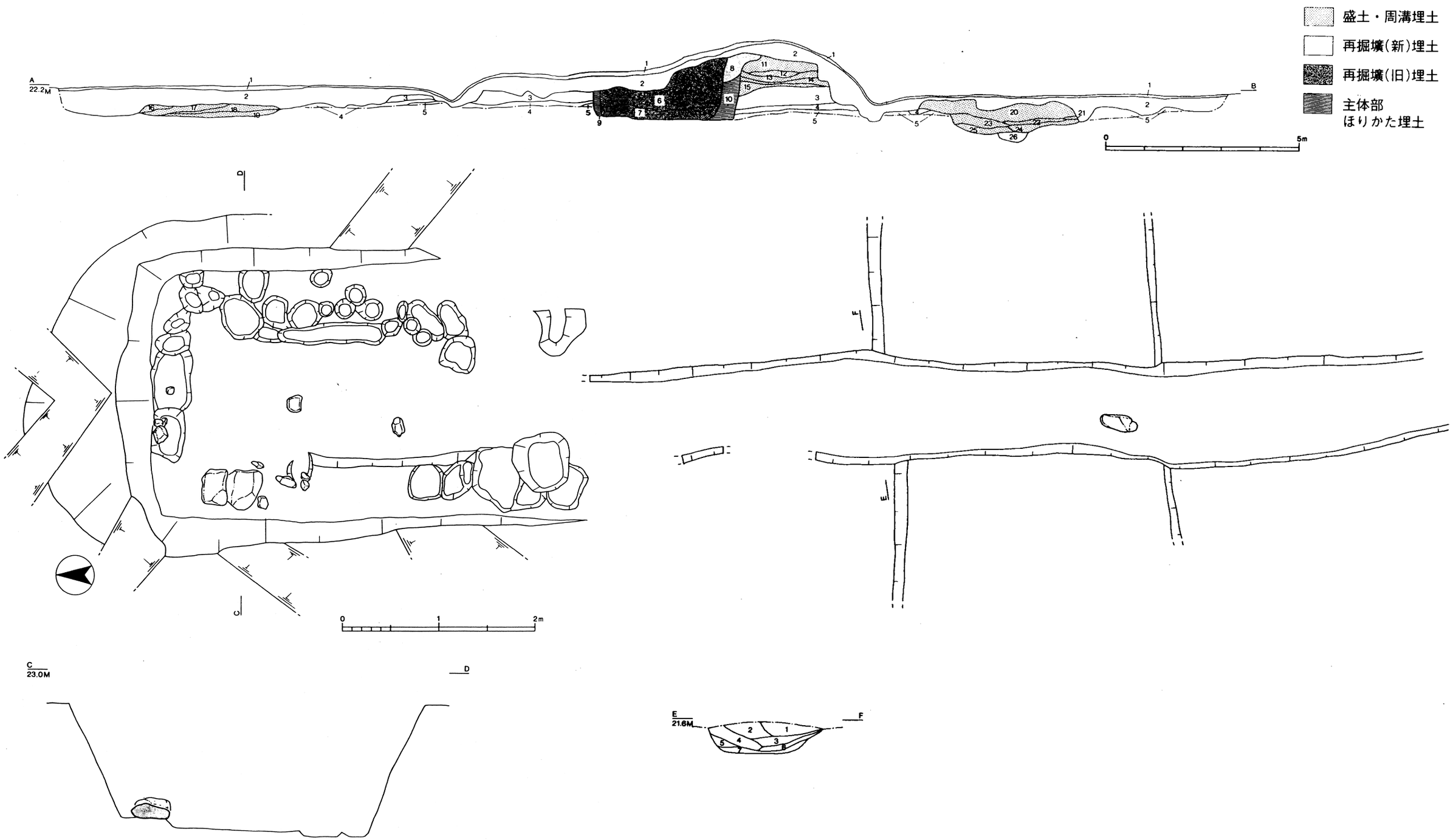
盛土の残存は少なく３分の１程度である。土層断面図ＡＢ（第６図）では11～15にあたる。黒色土、褐色土、黄褐色土が交互に盛られており周溝部分にも流出している。墳丘下において旧表土は確認されなかったが、旧表土によって覆われていたと考えられる黒色土が保存されている。土層断面ＡＢ（第６図）の観察結果は以下のとおりである。

(1) 現在生成されつつある腐植土層。枯葉等からなる
(2) 黒色土　（10YR1.7/1）。耕作、竹根等による撹乱層.
(3) 黒色土（10YR1.7/1）。いわゆるクロボク土
(4) 暗褐色土（10YR3/3）。漸移層
(5) 褐色土（10YR4/6）ないし黄褐色土（10YR5/6）。地山
(6) 暗褐色土（10YR3/3）。拳大の礫を含む．明褐色土（7.5YR5/8）
• 黒色土　（10YR1.7/1）を斑点状に含む
(7) 暗褐色土（10YR3/3）。６とほぼ同じ．ややしまりがある。褐色土（10YR4/6）を含む。明褐色土（7.5YR5/8）の割合高い
} 再掘壙（新）

(8) 褐色土（7.5YR4/6）。黒色土（10YR1.7/1）・褐色土（10YR4/6）モザイク状に混入する。
} 再掘壙（古）

(9) 褐色土　（10YR4/6）・黒色土（10YR1.7/1）．モザイク状を呈する
(10) ９と同じ
} 主体部ほりかた

(11) 黒褐色土（10YR2/3）。黒色土（10YR1.7/1）・黄褐色土（10YR5/8）をモザイク状に混入する
(12) 黒色土（10YR1.7/1）。褐色土（10YR4/6）をブロック状に含む
(13) 黄褐
} 墳丘盛土



第６図　上：墳丘及び周溝断面図（１/100）下：主体部実測図（１/40）

⒁ 12と同じ

⒂ 黒色土（10YR1.7/1）・褐色土（10YR4/6）。縞状あるいはモザイク状を呈する

⒃ 黒色土（10YR1.7/1）。いわゆるクロボク土

⒄ 黒褐色土（10YR2/3）。褐色土（7.5YR4/6）の粒子を含む

⒅ 黒色土（10YR2/1）。わずかに褐色土（7.5YR4/6）の粒子を含む

⒆ 褐色土（10YR4/4）。粘性少ない

⒇ 黒褐色土（10YR2/3）。粘性やや低い

(21) 黒色土（10YR1.7/1）。褐色土（10YR4/6）をブロック状に含む

(22) 褐色土（7.5YR4/6）。やや粘性高い

(23) 黒色土（10YR1.7/1）。褐色土（7.5YR4/6）をブロック状に含む

(24) 黒色土（10YR2/1）・褐色土（10YR4/6）

(25) 黒色土（10YR2/1）。

(26) 黒色土（10YR2/1）。にぶい黄褐色（10YR5/4）の砂を含む。

⒂〜(25) 周溝埋土

5．出土遺物（第7図）

(1) 主体部出土の遺物（第7図1〜9）

先述のとおり横穴式石室の再掘壙から出土したものである。

須恵器坏蓋（1〜3）いずれも天井部につまみをもち、口縁部内面にかえりをもつ資料である。つまみ部分は柱状で頂部が潰れた形態をもつ。明確なかえりをもつが口縁部より突き出ることはない。体部外面は1/3から1/2へラケズリされる。ろくろ回転は時計回りである。焼成は良好で暗褐色を呈する。1は推定口径9.6㎝、高さ2.5㎝、口縁部にて約1/2を残す。2は口径10.0㎝、高さ2.7㎝で、口縁部にて1/3を欠く。3は口径10.3㎝、高さ3.0㎝で口縁部を約1/4を欠く。

須恵器坏身（4〜5）いずれもゆるやかな丸底に近い底部とわずかに外反する口縁端部をもつ資料である。焼成は良好で暗灰色を呈する。4は体部外面を約1/2へラケズリされる。口縁部にて約1/2を残し、推定口径8.5㎝、高さ3.0㎝である。ろくろ回転は時計回りである。5は口縁部から体部にかけて一部分のみ残存する。推定口径9.0㎝を測る。

須恵器高坏(6)坏部のみわずかに残存する細片である。坏部外面には体部と底部との境界に2条の沈線を有する。焼成・胎土ともに良好で暗灰色を呈する。推定口径7.8㎝である。

壺(7〜9)7〜8は平瓶の口縁部と考えられる。7は口縁部にて約1/3残存する。口縁部は直線的に開き、端部は尖り外反する。一条の沈線を有する。焼成・胎土ともに良好で暗灰色を呈する。推定口径5.1㎝。8は口縁部にて約1/2残存する。口縁部はわずかに内湾する。焼成・胎土ともに良好で灰白色を呈する。推定口径7.0㎝。9は底部にて約1/3残存する。底部

付近はヘラケズリされる。ろくろ回転は反時計回りである。灰色を呈し、推定底径は6.5㎝である。

(2) 墓道出土の遺物（第7図10）

須恵器坏蓋(10)口縁部にて1/6を残す。丸みを帯びた天井部を有し、口縁部にて外反する。口縁端部は薄く、尖る。かえりは薄く、短い。ろくろ回転は時計回りである。天井部外面には列点紋が施される。青灰色を呈し、推定口径17.1㎝である。

(3) その他の遺物（第7図11～16）

表土及び周溝から出土した遺物である。

弥生壺形土器(11)底部のみ残存する。中央が窪んだぶ厚い底部である。内面はハケ目調整されるが　外面は保存状態が悪く調整手法は定かでない。焼成は良好で赤味を帯びた黄褐色を呈する。底径は4.6㎝である。

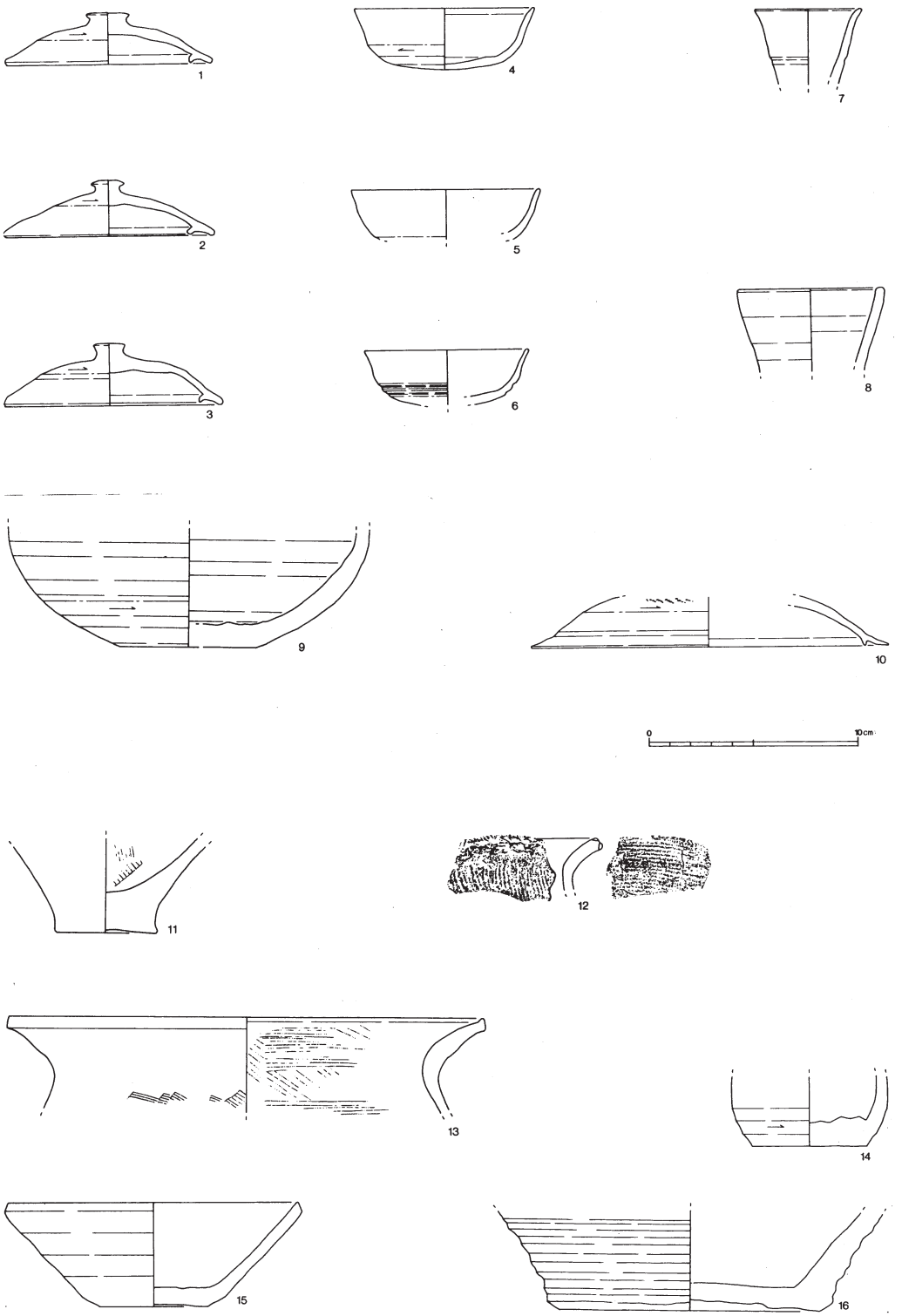
弥生甕形土器(12)口縁部のみ一部残存する。口縁部は緩やかに外反し、端部は角張る。外面はタテに内面はヨコにハケ目調整され、角張った端部の角には刻み目が施される。

土師器甕(13)周溝出土。口縁部にて約1/8残存する。口縁部はやや肥厚し大きく外反する。端部は角張り上方につまみ上げられる。頸部以下は斜位にハケ目調整され、口縁部外面はヨコナデされる。口縁部内面はハケ目調整されたあと、ヨコナデされる。焼成は良好で淡黄褐色を呈する。推定口径22.6㎝。

灰釉瓶子(14)底部のみ残存する。ろくろ水挽き成形され、ろくろ回転は反時計回りである。体部外面下方はヘラケズリされ、底部に糸切り痕を留める。灰白色を呈する。底径5.5㎝である。

山茶碗(15)周溝出土である。一部欠損する。体部は直線的に開き、口縁端部は角張る。底部の調整は粗雑で、糸切り痕が残る。胎土は粗く、灰白色を呈する。口径14.0㎝、底径14.0㎝、器高5.0㎝である。

白瓷系壺(16)底部のみ約1/4残存する。粗雑な成形で、底部は未調整である。小レキを多く含み、灰褐色を呈する。推定底径12.4㎝。



第７図　出土遺物（１/３）

器種		No.	法量 cm 口径	底径	高さ	形態の特徴	調整他	胎土	焼成	色調	ろくろ	備考
須恵器	坏蓋	1	(9.6)	——	(2.5)	頂部が潰れた柱状のつまみをもつ	1/3～1/2ヘラケズリ	並	良好	暗灰色	時計回り	1/2残
		2	(10.0)	——	(2.7)							1/3欠
		3	(10.3)	——	(3.0)							1/4欠
	坏身	4	(8.5)	——	3.0	口縁端部外反	1/2ヘラケズリ					1/2残
		5	(9.0)	——	?						?	一部残
	高坏	6	(7.8)	?	?		坏部に2条の沈線あり	精			?	坏部のみ一部残
	壺	7	(5.1)	?	?	口縁外反平瓶？	1条の沈線あり				?	口縁部のみ1/3残
		8	(7.0)	?	?	口縁部わずかに内湾平瓶？				灰白色	?	口縁部のみ1/2残
		9	?	(6.5)	?		底部付近ヘラケズリ	並	並	灰色	反時計	底部のみ1/3残
	坏蓋	10	(17.1)	——	?	口縁端部外反し尖る	列点絞	精		青灰色	時計	口縁部のみ1/6残
弥生土器	壺	11	?	4.6	?	底中央窪む	内面ハケ	並	良好	赤黄褐	—	底部のみ残
	甕	12	?	?	?	口縁外反	内外面ハケ端部に刻目				—	口縁一部残
土師器		13	(22.6)	——	?	口縁外反	口縁部ナデ			淡黄褐色	—	口縁部のみ1/8残
灰釉瓶子		14	?	5.5	?	底糸切り	体部下ケズリ		並	灰白色	反時計	底のみ残
山茶碗		15	14.0	5.2	5.0	体部直線的端部角張る	糸切り痕残る	粗			?	一部欠
白瓷系壺		16	?	(12.4)	?		底部未調整	並		灰褐色	?	底1/4残

表1　出土遺物一覧　（　　）は推定法量

Ⅳ. ま　と　め

蛸田古墳は市内の横穴式石室で５例目の調査となった(1)。墳丘は大部分が土取り等による削平を受けているうえ、主体部には新旧２度にわたる再掘壙が認められた。石材はほとんどが抜き取られており、本来の形状は石材抜き取り痕からその一部をかろうじて知ることができるのみである。したがって、石室の平面形態や袖の有無などについては詳しく言及することができなかった。

主体部出土遺物についても原位置を保っておらず、図示できた資料（第７図）はほとんどが細片である。これらの乏しい出土遺物から古墳に関係のある時期を求めるとすれば、第７図８～９と同図１～７・10の二つの時期が考えられ、後者はＴＫ４６形式(2)併行とすることができよう。一応古墳の築造時期が６世紀後葉、石室再利用の時期が７世紀中頃であった可能性を指摘するに留めたい。

さて、主体部から南に向けていわゆる墓道状の遺構が８.８ｍにわたって検出された。鈴鹿地方でこの種の施設は保子里18号墳、深溝狐塚古墳、北野古墳においても確認されており、四日市市域においては狐塚１・２号墳、北小松３号墳、御池５号墳などがある。以下これらの調査例を簡単に振り返りつつまとめとしたい。

保子里18号墳は鈴鹿川右岸段丘上に位置する径13.3ｍの円墳である。左片袖式の石室を有する。墓道は羨道入口から２ｍほどの短いもので周溝付近にて途切れているようである(3)。深溝狐塚古墳は椎山川上流の右岸側に位置する東西11.2ｍ、南北14.75ｍの方墳である。左片袖式の石室をもち、石室主軸はＮ25°Ｗで墳丘軸と一致しないのが特徴である。周溝を貫く約９ｍの溝が検出され、その底面は周溝より深くならず、周溝外に延びる部分は排水溝として報告されている(4)。北野古墳は深溝狐塚古墳と同じく椎山川沿いの左岸に位置する一片18ｍの方墳である。石室の主軸はＳ10°Ｅで、左片袖式である。検出された墓道は約50.5ｍにも及ぶ(5)。狐塚１号墳は径16.5ｍの円墳で、副室をもつ横穴式石室が検出されている。石室入口から周溝まで４.２ｍの墓道を有し周溝部分は陸橋となる特異な例である(6)。２号墳は径11.0ｍの円墳である。墓道は石室入口から墳麓まで３.８ｍにわたって検出されている(7)。北小松３号墳は内部川左岸に位置し、左片袖式石室を有する。石室主軸はＥ５°Ｎである。墓道は石室入口から４.５ｍの部分で直角に曲がるＬ字状のもので屈曲点から９ｍ以上続くことが確認されている希有な事例である(8)。御池５号墳は三滝川と江田川に挟まれた台地に位置する御池古墳群の一つで径12.2ｍの円墳である。副室をもち主軸はＮ37°Ｅである。石室入口から長さ２.５ｍの墓道が検出されている(9)。

これらの古墳の築造時期としては北野古墳・深溝狐塚古墳・御池５号墳がほぼ７世紀初頭に位置づけられ、保子里18号墳・北小松３号墳・蛸田古墳はやや古く６世紀末葉とすることができる。

以上決して多くはない墓道検出例の中にあって、周溝外へ長く延びるものや陸橋に接続するもの、途中で屈曲するものがあるなどバラエティに富むことが指摘できる。いずれにせよこうした墓道のありかたは追葬あるいは追善祭祀など石室再利用の実態の反映と考えられ、今のところ北

勢地方古墳時代後期後葉から終末期にかけての小地域性として把握できよう。その中でもとくに鈴鹿地方の深溝狐塚・北野・蛸田は一辺11～18ｍの方墳であることから古墳の平面形においても斉一性が窺える。さらに今後の類例の増加に注目していきたい。

〔註及び引用参考文献〕

(1) 保子里18号墳、深溝狐塚古墳、北野古墳、南山６号墳に次いで５例目である。

(2) 田辺昭三１９８１『須恵器大成』　PP34～45

(3) 真田幸成・仲見秀雄１９６４「保子里18号墳発掘調査報告」『神戸史談』第４号　PP９～19

(4) 大場範久・仲見秀雄１９７２「深溝狐塚古墳調査報告」『神戸史談』第８号　PP７～11

(5) 大場範久１９７８「北野古墳」『三重用水加佐登調整池関係遺跡発掘調査報告』　PP６～11

(6) 小玉道明１９７０『狐塚１号墳発掘調査報告』

(7) 小玉道明他１９７０「狐塚２号墳」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』　PP136～141

(8) 北野保・早川裕己１９７７「北小松古墳群」『北小松古墳群・日永貝之谷古墳』　PP１～６・18～19

(9) 小玉道明１９７３「御池５号墳」『四日市の後期古墳』　PP９～14

写真図版１

調査前全景

作業風景

主体部と墓道

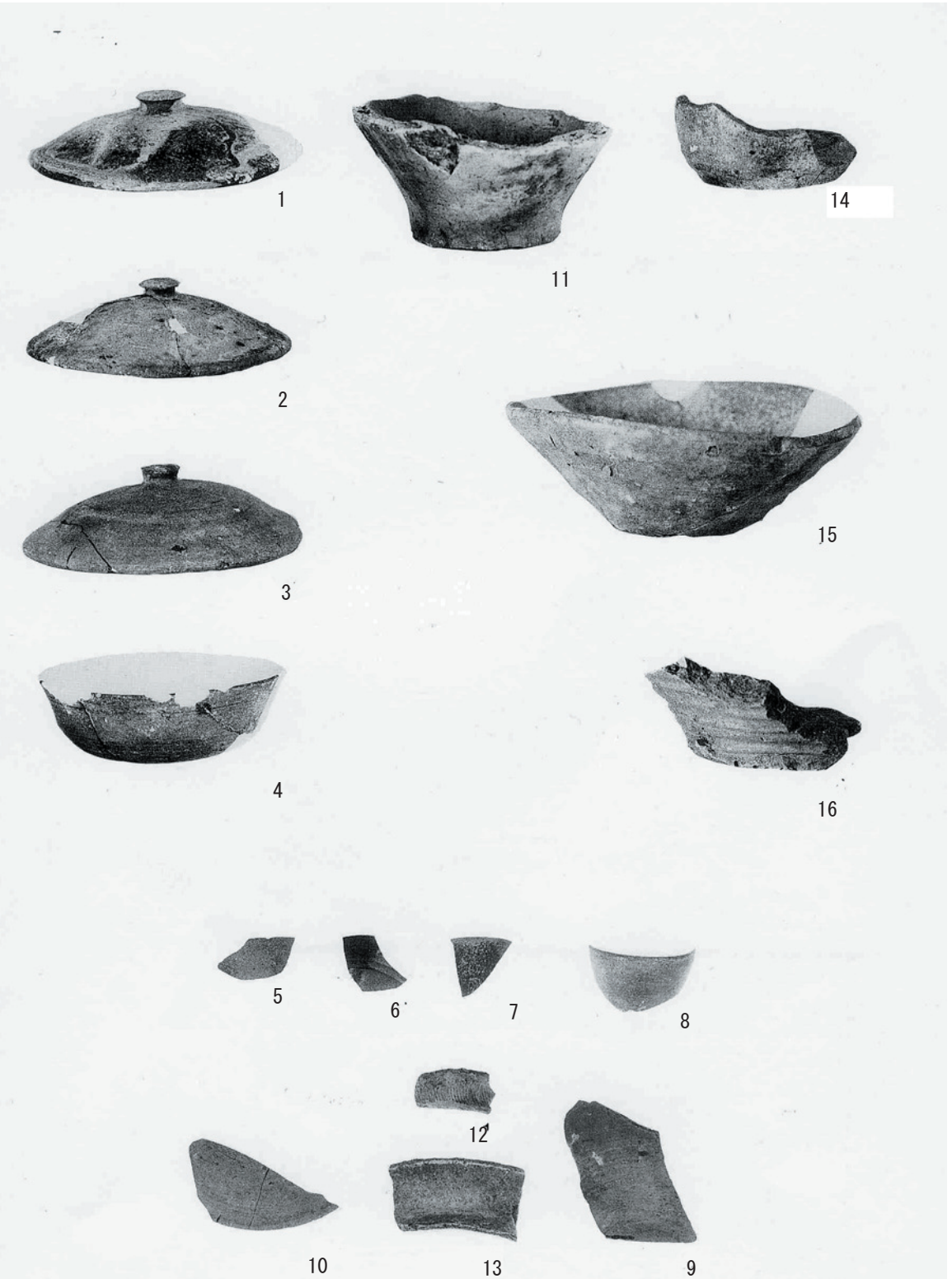
写真図版 2

石材抜取痕

主体部

調査後全景

写真図版 3



出土遺物

鈴鹿市埋蔵文化財調査報告Ⅹ
蛸　田　　古　墳

1991年10月

編集・発行　鈴鹿市教育委員会
　　鈴鹿市教育委員会

印　　刷　㈱一誠堂印刷所